今日も取材日和

ースポーツアナウンサーの体当たり奮戦記ー

テレビ東京アナウンサー
佐々木明子

旺文社

需要全本请访问 www.ertongbook.com

今日も取材日和

～スポーツアナウンサー
の体当たり奮戦記～

初版発行　2000年4月17日

著　　者　佐々木明子
編集制作　株式会社　旺文社
　　編集責任者　吉田宰
　　編集担当者　宮澤静也
　　編集協力　大宮悦子
　　デザイン　有限会社エストール

発 行 者　赤尾文夫
発 行 所　株式会社　旺 文 社
　　〒162-8680　東京都新宿区矢来町 78
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　図書印刷株式会社

●乱丁・落丁本については、送料小社負担にてお取り替えいたします。
●お客様相談窓口　Tel. 03(3266)6400
●ホームページ　http://www.obunsha.co.jp/

Y0C019
©Akiko Sasaki 2000
（許可なしに転載、複製することを禁じます）
Ⓡ＜日本複写権センター委託出版物＞複写希望者は日本複写権センター（03-3401-2382）まで
ISBN4-01-050091-3　Printed in Japan

◇旺文社「図書案内」をご希望の方にお送りいたします。下記フリーダイヤルにご連絡ください。
◇旺文社には本書以外にも多数の出版物がございます。お近くの書店で品切れの場合は、下記までご相談ください。

お客様専用フリーダイヤル
0120-024-819
（受付時間は土・日・祝日を除く 9:30～17:30）

今日も取材日和

ースポーツアナウンサーの仕事ー

佐々木明子

旺文社



今日も取材日和

需要全本请访问 www.ertongbook.com

はじめに

アナウンサーになって9年目。中堅どころかもうベテランといっていい年月が過ぎました。スポーツを中心に取材を続けてきたものの、現場で拾った選手の意外な素顔や厳しさ、ドラマチックなその舞台裏も、時間が限られた番組の中ですべてを伝えることは不可能で、もったいないもったいない、そんなフラストレーションを抱えながら新聞の連載や雑誌のコラムで「書いて伝える」ことにささやかな楽しみを見出していました。そんな時、旺文社の「SPORTER―大学スポーツオールガイド―」という本で、学生時代夢中になったラクロスについての取材を受けたことがきっかけで編集者の方と知り合い、スポーツで話が盛り上がり何気ない会話からこの本を出版することになったのです。

もちろん、作家でもジャーナリストでもありません。私の職業は言葉で伝えるアナウンサーです。そんな素人の私が本を書くなんて恐れ多いことではありますが、端的に表現しなくてはならないアナウンサーとは違って、じっくり時間をかけて描写できたり選手や監督のこと、そして自分の感情を素直に表現できることに、今、心地よい開放感を覚えています。「テレビ」が喉ごしすっきり刺激的なビールであるならば、「書籍」はじっくり旨味を味わい余韻を楽しむ日本酒とでもいいましょうか。表現したいことは同じでも、伝え方次第で味わいも変わってきます。私は幼い頃から本に囲まれて育ちました。マンガやテレビを禁止された代わりに、父は「本が欲しい」と言えばどんなに高価なものでも買ってくれました。今、本屋で童話の棚を見るとほとんどといっていいほど見覚えのあるものばかり

で、我ながらびっくりします。本を友達にしていた私は言葉が遅くて母は心配したそうです。そんな私が言葉を操るアナウンサーになって、たくさんの人たちに会い、そのこぼれ話を一冊の本にしようとしているのですから人生何が起こるかわからないものです。基本が「スポーツ大好き」人間の私は、幸い仕事に恵まれて普通では出会えないプロフェッショナルな人たちと出会い、そこから多くのことを学びました。見えないものが見えてきたり、見たくないものまで見えてくることもありましたが、何より自分自身が取材者として恥ずかしくない人格でありたいと常に志を高く持つことができたような気がします。

この本のタイトル「今日も取材日和」は取材先で巨人軍・長嶋監督に言われた言葉です。「よく来ましたね。こんな日差しの中だと気持ちよく取材できるでしょう」何となく心に残っていた言葉ですが、出版にあたりまだ中身を書いてもいないのにタイトルだけはどうしてもこれがいいと編集者に無理を言い、早々と決まりました。

慌ただしい日々の中で落とし物はたくさんあります。つい見落としてしまったり、気がついても素通りしてしまったり。いつでも多くのことを拾っていける心のゆとりを大事にしたいと思いながら、そのいくつかをここにしたためてみました。電車の中で時間つぶしに、眠れない夜に。でも、できることならばあったかい日だまりの中で何気なく手にとって読んでもらいたい、そんな願いを込めて。

2000年4月　佐々木明子

もくじ

第1章　プロ野球編

・強力！長嶋ウイルス――長嶋茂雄監督……9
・生粋のエンターテイナー――長嶋茂雄監督……10
・長嶋茂雄という生き方――長嶋監督インタビュー……16
・長嶋vsジャンボ・竹馬対決!?――長嶋茂雄監督・ジャンボ尾崎選手……24
・父・長嶋茂雄――長嶋一茂さん……32
・永遠のライバル――長嶋茂雄監督・野村克也監督……40
・カツノリの葛藤……48
・シーズンオフの松坂選手……58
・大魔神、大きくなる――佐々木主浩選手……66
・ビールまみれでプールにダイブ――優勝祝勝会……74
・純子の部屋で金縛り――キャンプ取材……80

第2章　サッカー編

・ＫＩＮＧ・カズに魅せられて――三浦知良選手……85

・ゴンのプロ意識——中山雅史選手……98
・亭主関白？それとも……——井原正巳選手……104
・パリの危険な夜……110
・ラーメンとチケット騒動と15万——W杯取材……116

第3章　スポーツなんでも編

・丸ちゃん、恐るべし——丸山茂樹選手……124
・横綱を張り飛ばした女——大相撲……132
・「死んでもいいのかな…」——竹原慎二さん……138
・史上最強の母子鷹——山本美憂選手……144
・日の丸が踊った世紀の一瞬——長野五輪……150
・むきたてのゆで卵——島崎京子選手……156

第4章　アナウンサー編

・ナマ足で面接——入社試験〜新人時代……164
・女性アナウンサー　ホントのところ……172
・女性アナウンサー　ホントのところ　その2……180

・人生で一番嫌な思いをした日……188
・マイアミのお化け……198
・袖の中を走り回る子ども!?……204
・転んでもただでは起きぬ……212
・スノーボードで狂乱!?……220
・震災が残したもの……228
・メイクと遠近法……234
・男と女、どっちがいい？……240
・祝！寿・座談会　佐々木明子・木佐彩子・久保純子……248
おわりに……260

プロ野球編

知ってるのは巨人と阪神だけ。セリーグとパリーグが何球団あるのかも知らない野球オンチの私がスポーツニュースの担当になった時は、それはそれは毎日パニック状態でした。「とにかく現場に行って勉強しろ」放り込まれたグラウンドは巨大な選手に男性記者でいっぱい、それでも恐れおののきながら足繁く通うこと７年。その間に私が取材し出会ったたくさんの素敵な皆さん。その素顔をチョコッとだけしたためてみました。

強力！長嶋ウィルス

長嶋茂雄監督

「おや、来ていたんですか。今日はお天気もいいし取材日和でしょう」

宮崎の青空が長嶋監督にはよく似合う。毎年訪れる巨人の春季キャンプは、私の心の風物詩だ。

「今日はちょっと肌寒いですねえ。風邪が流行ってるから気をつけなさいね」

金網に張りついている初老の女性に、監督が昔からの友人のように親しげに話しかける。監督の顔を真正面から見ようと必死だったその女性は、思いがけず声をかけられてびっくり仰天、明らかに動揺して、何を言ってるのかわからない〝あわわわ状態〟になっていた（笑）。無理もない、監督の行動はいつも突飛だから。

子供を抱えたママさんには「いくつになりましたか？」

「4つなんです」

その答えに「大きくなりましたねえ」

後ろで手を組んで、うんうんうなずきながらゆっくり歩いていく。昔からの知り合いなのかと思ったら、「初めて生で監督を見ました」と感動している。うぬぬぬ…。きっとこのママさんは、今日のことを子供にずーっと語り聞かせるだろう。あなたは、あの長嶋監督に大きくなりましたね、そう話しかけられたのよ。テレビで見るたびに、新聞で見るたびに、周りの人たちに「監督は優しく声をかけてくれた」と自慢して回るだろう。

すでに携帯電話を取り出し、誰かに電話して興奮しながら事細かに説明しているママさんの様子を見ながら、あらためて監督の持つパワーにほれぼれしてしまった。

今でも思い出しては笑ってしまう情景がある。

いつものように、ファンに話しかける監督。

「巨人ファンですか、そうですか、どちらからいらしたんですか?」

問いかけられたおばさんは「宮崎市内からです」とどぎまぎしながら答える。すると「宮崎ですかあ、そうですか、そしたら九州地方だ」と監督。

おばさん、興奮して「そうです、九州から来ました」

……宮崎が九州にあるのは誰でも知っている。

おばさんも何を言ってるのか自分でわからなくなってるのだろうな、と思っていると、人のことは笑えない。監督は隣にいた私に気がついて、

「おや、佐々木さん。いつ来たの、今日？　何で来たの、ん？　飛行機？」

「はい、飛行機で。今日の朝イチの便で…」

そう答えながら、自分でもおかしくなってしまった。

宮崎まで飛行機以外どうやって来るのだろう。今時、取材に行くのに船便で一日かけて来る人がいるだろうか。妙な質問とわかっていても、なんだかつられて答えてしまうのだ。わずか5分ぐらいの間に、これだけのエピソードができてしまうのだから、監督は本当に話題に事欠かない。プロ野球のシーズンオフでも、番組は監督のエピソードを再現するだけで視聴率が取れてしまう。まさに生きる経済効果と言っていい。

監督の視線は、恐ろしい感染力を持つ強力なウイルスだ。0.1秒、視線がかすっただけで、みんなアッという間に監督病にかかってしまう。監督もそれをよく知っているから、グラウンドでも、移動の時も、一人でも多くの人と眼が合うようにと気配りをしている。

テレビ東京のカメラマンが言う。

「監督は試合が始まる直前にベンチから身を乗り出すと、必ず横一線に並んでいる各社のカメラ一台一台に視線を渡してくれるんだ」

レンズ越しに監督と見つめ合うカメラマンは、そりゃあもうドキドキなんだって。今日は顔色が悪かったとか、昨日よりは機嫌がいいよ、肌に艶もあるし視線に力があるよとか、まるで恋人のよう。

カメラといえば、長嶋監督をずっと撮り続けているスポーツカメラマンに、こんな話も聞いた。現役の頃、監督は練習でフリーバッティングを終えると、必死で写真を撮っている彼の所に歩み寄り、「今日はどうだい?」と聞いてきたそうだ。バッティングの調子がいい時は軸がぶれないから、シャッターを切る彼は位置を変えずに済むけれど、悪ければどうしても少しずつ位置をずらさなければならない。それをよく知る監督は、調子のバロメーターとして、いつも彼に確認に来たとか。そんな選手はいなかった。カメラの力を利用するなんて、なんて頭が切れるのだろう、と彼は感心したという。

選手時代は技術の向上に役立てたカメラも、今は「プロ野球界を引っぱるマンモス球団の長として切っても切れない関係にあるから」、とマスコミにもできる限りのサービスを心がけている。どの局も一度は目を合わせることができるから、もちろん、その映像を使うわけ

で、お茶の間にも監督ウイルスが流れていく。すごい。『リング』の貞子もびっくりの威力。

大会社のお偉い方々が、監督の前で石像になる姿を何度も見た。

「長嶋の大ファンなんだよ、僕は」

紅潮した顔で、現役時代のあの試合を見に行ったとか、どこかのパーティで一度あいさつしたんだけど、やっぱり覚えていなかったようだとか、ハイテンションで話すお偉方の顔は、すっかり童心に戻っている。

こんな幸せな気分にさせてくれるウイルスなら、感染してもいいよね。って、アレ？　私は天下の長島監督を風邪の「ウイルス」に喩えちゃってますね。こりゃ大変な失礼。でも、監督に一度でも会ったことのある人ならわかるはず。ホントにすごい感染力（またまた失礼！）なんだから。



監督を何度も取材しているうちに、私も長嶋ウイルスにしっかり感染しました。

需要全本请访问 www.ertongbook.com